公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2019 年度
研究課題（タイトル）	近代鎌倉長谷における老舗三橋旅館を介した地域交流に関する研究
研究者名※	押田 佳子
所属組織※	日本大学 理工学部 准教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	86 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（　）は、報告書提出時所属先。

（研究報告-様式 2）

大林財団２０１９年度研究助成実施報告書

所属機関名　日本大学
申請者氏名　押田佳子

研究課題	近代鎌倉長谷における老舗三橋旅館を介した地域交流に関する研究

（概要）※最大 10 行まで

少なくとも 19 世紀以前より鎌倉長谷に存在した老舗旅館「三橋旅館」は、関東大震災による甚大な被災に伴い閉業した。その後、約 100 年間に亘り三橋旅館についての詳細は不明とされてきたが、この度、宿主後継者の協力の下、当時の資料を貸借、拝見することが叶った。そこで、これに基づく資料調査、ヒアリング調査をもとに、三橋旅館を中心に長谷で展開された地域間ネットワークを「地域交流状況」として明らかにしたうえで，近代長谷の発展プロセスを把握した。その結果、三橋旅館は海水浴場開設期以降、旅館経営を拡大しつつ、長谷の近代化を牽引したことを捉えた。一方で、三橋旅館に端を発する別荘地化の進展は、三橋旅館自体の衰退を招き、最終的には別荘文化とともに関東大震災で終焉を迎えたことが明らかとなった。その後、地域との関りが途絶えたとともに、三橋家所有の敷地も震災後の復旧事業や世代交代とともに縮小し、現状に至ったことが示された。

１．研究の目的

わが国を代表する観光都市・鎌倉における古都観光は、江戸時代以降に江戸から江ノ島、大山へ至る観光の中継点として発展した。明治維新後は、保養地や海水浴の適地と評されたことにより、由比ヶ浜周辺地域の保養・療養地開発は飛躍的に進められた。特に中世より長谷寺や鎌倉大仏などの名刹が存在する長谷においては、由比ヶ浜への眺望が得られるという好立地より、名門華族らの高級別荘地として栄えた。ここで、土地勘のない華族や政治家，文化人などを長谷に誘った名門旅館・三ツ橋こと「三橋旅館」は、近世から近代にかけての劇的な観光の変化を見守ってきた存在といえる。三橋旅館は、1809（文化 6）年には開業していたことが確認されており、近代には、鶴岡八幡宮前（雪ノ下）や鎌倉停車場前に別館も構えるほど大規模な営業展開をしていたが、1923（大正 12）年の関東大震災で被災し閉業している。以降、三橋旅館は今日まで再建されていないが、近年、最後の宿主の後継者より、閉業前後の書簡が明らかとされた。これらの書簡は全て未発表のものであり、三橋旅館の宿主一族および宿泊・利用客の目を通してみた長谷の記録は、近代におけるまちの発展プロセスを知る上で貴重な資料となり得るといえ、加えて、三橋旅館の宿主一族（現在も当時の敷地の一部に居住）および近隣の老舗店主より長谷および三橋旅館に関わる伝承などを抽出した成果を地域に還元することは、地域の記憶を埋没させないためにも必要といえる。

そこで本研究では、かつての鎌倉長谷を代表する老舗旅館「三橋旅館」に着目し、資料調査や宿主一族、近隣店主へのヒアリング調査をもとに、三橋旅館を中心に長谷で展開された地域間ネットワークを「地域交流状況」として明らかにしたうえで，近代長谷の発展プロセスを把握することを目的とする。

２．研究の経過

本研究を遂行するにあたり、三橋旅館所蔵の書簡調査に加え、三橋家現当主（最後の宿主・三橋茂三郎氏の孫にあたる）および周辺の老舗店等へのヒアリング調査、郷土資料の文献調査を実施した。

研究の経過は以下の通りである。

２－１　三橋旅館所蔵の書簡調査

当初は 2020 年４月中に三橋家に赴き、土蔵内の文献を分類、その後調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言発令を受け、対面での調査を延期とし、６月以降、「明らかに旅館時代と関係する書簡」を大学研究室に送付いただき、それを開封し、研究関連資料と判断されたものについて、読み取り調査を行うこととなった。７月以降は、数度現地にて確認したものを研究室に送付し、同様に調査を進めた。なお、書簡は大正 12 年前後の和紙によるものであるため、開封時点で既に傷みが酷く、虫食い状態にあるものもあった。加えて、震災以前のものについては、被災したものの中から辛うじて保存に至ったものもみられ、いずれも手に取って分析するのは困難と判断した。

そこで、これらの資料を古資料のスキャンを専門とする業者に依頼し、デジタル化したものをもとに調査・分析に至った。

なお、今回の調査で確認した書簡数は 5,000 件を超え、うち確実に三橋旅館自体に関係することが確認された約 2,540 件を調査対象とした。

２－２　三橋家現当主および周辺の老舗店等へのヒアリング調査

三橋旅館自体に関する伝承や遺物を確認するため、三橋家現当主（50 代）、およびその母親（80 代）へのヒアリングを 2020 年６月から 2021 年１月までの期間に、12 回実施した。また、旧三橋旅館の周辺にはかつて関わりがあった老舗や寺院が現存している。書簡調査をもとに、各店主へのヒアリング調査を 2020 年 10 月から 12 月までの期間に、５回実施した。

なお、調査対象者の多くが高齢者であることより、事前に質問事項を送付し、現地での滞在時間が短く短くなるよう配慮した。

２－３　郷土資料の文献調査

近代鎌倉には，別荘地・保養地に多くの著名人が滞在した記録があり、対象の三橋旅館は、皇族，華族，氏族との交流の記録も数多く残されている。本研究では，神奈川近代文学館により取り纏められた「神奈川文学年表」および鎌倉市史をはじめとする郷土資料における三橋旅館および三橋家に関する記述をもとに、三橋旅館の履歴より導かれる長谷の動向を抽出した。

３．研究の成果

本研究の成果として「地域発展プロセスにみる地域交流」と「閉業後の敷地変容」を捉えることができた。以下に各項目について述べる。

３－１　地域発展プロセスにみる地域交流

文献調査より、三橋旅館の履歴および長谷の動向に関する記録は全 102 件あり，その内容より，「旅館運営確立期」「海水浴場開設期」「旅館運営拡大期」「三橋旅館終焉期」の 4 期に分類された。

以降、各分類に従い、結果および考察を述べる。

（１）旅館運営確立期（～1876 年）—旅館運営確立期の記録は 8 件みられ、『江ノ島参詣之記書写』の「長谷村三ツ橋と言旅店と止泊」にあるように、19 世紀には既に料理を提供する旅館となっていたことが確認されている。また、書簡より、1870 年代に宿主であった三橋小左衛門は「名主」や「農・役人」「長谷村の戸長」であったことが確認された。以上より、旅館運営確立期は、三橋家が旅館運営と地元・長谷における有力者としての地位を確立した時期といえる。

（２）海水浴場開設期（1877～1890 年）—海水浴開設期の記録は 24 件みられ、1885（明治 18）年には、東京毎日新聞広告欄の「此度由井ケ浜海水浴ヲ設ケ」にみられる、由比ヶ浜に所謂プライベートビーチを設立した。これは、内務省初代衛生局長の長与専齋の勧めを受けたことに依るが、「海水浴御馳走」「三橋與八楼上望由井浜海水浴」にみられるように、三橋旅館が療養や保養の要素が色濃かった当時に海水浴をいち早く観光資源として捉えていたことが伺える。これは、「（体を洗う水を）旅館の方にじいやさんがいて、担い桶で担いで運んできた」にもあるように、観光客への先進的なサービスを施すに至ったとみられる。このような取組みの甲斐があって、「海浜に鞘や遠くして浴遊に不便」であった三橋旅館が、「併し是さへ本年増築の客房迄も填充の有様」「夏時浴海ノ客絶エズと云フ」のように、海水浴客による繁昌へと繋がったことが窺える。また、当時の三橋旅館への来訪者は、伊藤博文や福沢諭吉、外国の要人など錚々たる面々であり，彼らの連絡手段確保のために、敷地内に郵便局を設置したり、鎌倉において２番目の電話番号を取得するなど、近代インフラが積極的に導入されたことが捉えられた。

以上より，海水浴場開設期における三橋旅館は，海水浴場の開設に伴い、長谷における近代化導入の窓口の役割を果たしたといえよう。

（３）旅館運営拡大期（1891～1911 年）—旅館運営拡大期の記録は 58 件みられ、このうち三橋本館についての記録が最多の 44 件であり、三橋出張が 1891（明治 24）年以降に 6 件、三橋別館が 1899（明治 32）年以降に 3 件、三橋別荘および三橋第三別荘が 1909（明治 42）年以降にそれぞれ 3 件，2 件，さらに三橋駅前出張は 1910（明治 43）年以降に 2 件，と時代を下るに従って旅館経営を拡大していった。これは，海水浴場開設期において宿泊客が三橋本館の許容を越えており，足りない客室を他の施設で補うため，規模の拡大を図るに至ったことに起因する。

また、旅館運営拡大期の三橋本館は、海水浴場開設期同様、著名人が訪れる場であり、かつ、「鎌倉銀行が長谷の三橋旅館の倉庫のひさしのところに，長谷出張所をこしらえ」にみられる、近代インフラ導入の場として機能していた。加えて、観光客の増加により長谷界隈には様々な商店が立ち並ぶようになったことで、 歌舞伎役者の市川左団次が三橋旅館から友人・吉井勇を訪ねてビリヤード場「快々亭」へと赴いたことより、周辺の娯楽も充実していたことが垣間見える。さらに、当時の江の島や由比ヶ浜は，鉄道の普及に伴い東京からの来訪が容易になったことで、朝日新聞や三越呉服店といった大企業の運動会の場となり、その延長として周辺を観光する社員みられるようになった。特に、三越呉服店が由比ヶ浜で慰安會を開催した際には、三橋本館が来賓用の待機室，三橋第三別荘は専用の新聞印刷所として機能し、宿主三橋与八自ら長谷の取りまとめ役として慰安会をバックアップする体制を作り出し、地元の漁師や商店の売り上げに大きく貢献したといえよう。

一方で、1888（明治 21）年に初めて三橋旅館を訪れ、当地を気に入った前田俊嗣は、1890（明治 23）年に当地に別荘を建築し、以降は 1899（明治 32）年に前田別邸の建物を三橋旅館に払下げたり、1909（明治 42）年に皇后が前田邸を訪れた際の料理を調達するなど、三橋与八との交流は継続したが、同様の別荘族の増加が上級の宿泊客を逃す結果に繋がったことが推察される。

以上より、旅館運営拡大期は、三橋旅館自体の拡大に加え、三越の慰安會にみられる長谷全体の観光が発展した時期といえよう。一方で、三橋旅館を介して進展する別荘地化は、皮肉にも三橋旅館の運営に陰りを及ぼすに至ったことが類推された。

（４）三橋旅館終焉期（1912～1923 年）—三橋旅館終焉期の記録は 12 件みられ、このうち 3 件は 30 年以上の長きに亘り三橋旅館を核に近代長谷を発展させた三橋与八の逝去に関するものであった。与八から茂三郎への正確な代替わりの時期については記されていないが、大橋良平の『現在の鎌倉（1912(明治 45)年)』には「三橋樓　三橋茂三郎」とあることから、与八の逝去前は代替わりされていたことがわかる。一方で，雪ノ下にあった三橋出張が 1920（大正 9）年の『最新実測鎌倉江之嶋詳細図』には「山口旅館」と記されており、前期までの運営拡大から一転、縮小したことがわかる。また、1922（大正 11）年には、陸奥宗光ら別荘族によるまちづくりの会「鎌倉同人会」の懇親会が三橋旅館で催されるなど、引き続き著名人の利用は為されたものの、1920（大正 9）年に谷崎潤一郎と女優が立派な門構えにびっくりして泊まらず引き返したとあるように、庶民には手が出ない高級旅館というイメージは固定され、客層の拡大に繋がらなかったことが窺えた。最終的には 1923（大正 12）年の関東大震災により三橋旅館は倒壊、長谷一帯も津波と火災の被害を受け、長谷の発展を支えた別荘地の壊滅，および別荘族の流出を促すこととなった。

以上より、三橋旅館終焉期は関東大震災を契機として、三橋旅館とともに近代長谷の別荘文化が終焉を迎えた時期といえよう。

（５）「三橋旅館」を通してみた近代長谷の地域発展プロセスにみる地域交流—以上より、旅館運営確立期に旅館運営と地元長谷での地位を確立した三橋旅館は、続く海水浴場開設期に一早く海水浴場の開設に乗り出し、療養の一環であった海水浴を観光産業として確立したことに加え、訪れた要人の需要に応えるべく、電話や郵便局など地域の窓口たる機能を誘致したことより、長谷における近代インフラ導入の役割を果たしたことが捉えられた。さらに、旅館運営拡大期には、三橋旅館自体の拡大に加え、観光客の増加に伴う長谷の町並が拡大・発展し、三越の慰安會にみられる三橋旅館を介した長谷全体での観光の実現が捉えられた。一方で、三橋旅館に端を発する別荘地化の進展により、三橋旅館の運営は徐々に陰りを見せはじめ、三橋旅館終焉期には関東大震災を契機として、三橋旅館とともに近代長谷の発展に大きな影響を与えた別荘文化も終焉を迎えたことを捉えた。

３－２　閉業後の敷地変容

調査より、三橋旅館の敷地の変容状況を、震災以前、震災直後、震災復興期、復興後に 4 分類した。以下、これに従い結果及び考察を述べる。なお、調査結果を表に示す。

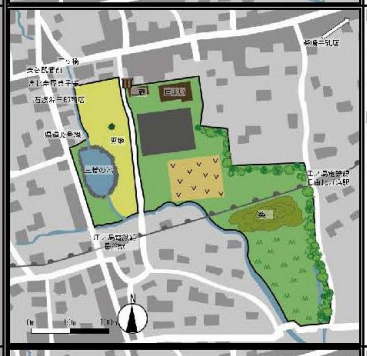
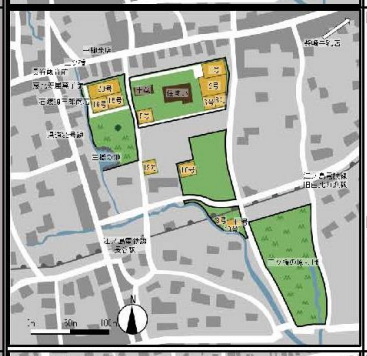
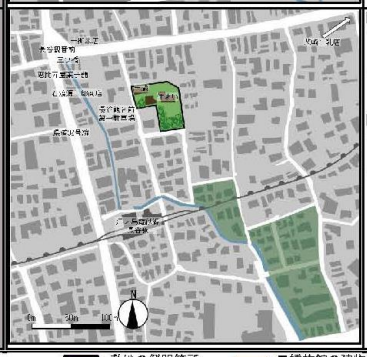
（１）震災以前—表より、三橋旅館は営業当時、長谷観音前交差点から由比ヶ浜に至る敷地約 11,000 坪を所有していた。敷地内には旅館ならではの料理場や帳場、座敷(図－1)をはじめとする建物に加え、築山を設けた広大な庭園があったことが確認されている。当時の三橋旅館には石渡源三郎商店をはじめ多くの業者が出入りしており、長谷寺の大祭時には人力車の列が長谷小路沿いに約 300m 並ぶ程賑わっていたと、現在にまで伝わることが捉えられた。

（２）震災直後—表より、震災に伴う火災により料理場が位置した長谷小路沿いに接する敷地の約 694 坪が焼失した。震災直後は瓦礫の処理等もあり、現在の県道 32 号線に面する「三橋の池」周辺は更地になっていた。また、庭園の築山は盛土により標高が高かったため、稲瀬川を遡上した津波の難を逃れている。一方で、出火元が三橋旅館と噂されたことにより初代当主が周辺地域との関係性を疎遠にし始めたことを捉えた。

（３）**震災復興期**―表より初代当主は土地の整理を行い 1928（昭和 3）年には震災以前の半分以下となる約 4,453 坪まで敷地は縮小した。このころの三橋家は貸別荘業を営み（図－4）、少なくとも 13 区画（約 480 坪）を貸し間としていたことが捉えられた。また、築山は手付かずのまま所有されており、地域の縁日に「三ツ橋の原っぱ」と称して地域の縁日などで利用されていたことが捉えられた。

（４）**復興後**―表より、二代目当主の相続等によって更に敷地を縮小し約 3,000 坪となった。この際に手放された「三橋の池」は埋め立てられ、現在は長谷観音前第一駐車場となっている。一方、同地にはかつての三橋旅館庭園にあったクロマツが現存し、三橋家土蔵と伴に三橋旅館当時の面影を偲ぶものとなっている。

表　三橋旅館の敷地変容並びにヒアリング調査結果

	旧三橋旅館敷地変容及び施設配置図	敷地及び施設配置	ヒアリング調査結果
1911(M44)年～関東大震災以前 震災以前		[敷地] ・1911(明治 44)年段階で旅館および周辺の敷地約 11,000 坪を所有[21][5][4] [施設配置] ・「料理場」「帳場」「座敷」「住まい」「玄関」「土蔵(現存)」が存在[※1] ・「料理場」は石渡源三郎商店の裏にあった[※1] ・座敷の南側に位置する松の木は現在も生育しており樹齢は 100 年を超える ・江ノ島電鉄線、旧由比ヶ浜駅西側(現住宅地)に「築山」が存在[※4] 図－1 三橋旅館座敷	・三橋旅館は石渡源三郎商店(豆類、乾物)の得意先であり、鰹節、椎茸、豆、乾物類を卸していた[※1] ・1890(明治 23)年より長谷に転入した柴崎牛乳店(現存)は和食中心の三橋旅館には卸していなかったが、地元の名士として存在は知っていた。長谷寺の大祭時には、長谷観音前交差点から柴崎牛乳店までの長谷小路沿い約 300m に亘る人力車の列ができるほど賑わっていた[※4] ・恵比寿屋菓子舗は三橋旅館の表門前で宿泊客に饅頭を販売していた（現在は三ツ橋前に移転）[※4] ・長く三橋旅館に逗留していた山口県の幕末の藩士「杉聴雨【1835(天保 6)年～1920(大正 9)年】」は、1913(大正 2)年に光則寺へ三橋旅館の名を入れた石碑を寄贈した[※2] 図－2 三橋旅館表門
1923(T12)年～1928(S3)年 震災直後		[敷地] ・「料理場」が存在した敷地(約 694 坪)が失われる ・図に示す南側に位置する「畑」や「田」の位置は雑地へと変化した[※4] ・「三橋の池」東側は更地と変化し利用されていない[※1] [施設配置] ・火災の影響により、「料理場」「帳場」「座敷」「住まい」「玄関」が焼失[※1][※2][※3][※4][※5] ・三橋旅館建物は震災直後の火災により焼失[※1][※2][※3][※4][※5] ・稲瀬川以西は標高が低かったため津波の被害を受けたが東側の「築山」周辺は標高が高かったために津波の難を逃れた[※4]	・関東大震災の際、お昼の時間であったことから三橋旅館では昼食の支度をしており、その際に料理場から出火し、飛び火により石渡源三郎商店は焼失したと伝わっている[※1] ・関東大震災による三橋旅館の消失に伴い、石渡源三郎商店との卸売得意様関係は失われた[※1] ・関東大震災の影響により三橋旅館は出火の原因と噂されたことで、初代当主が長谷地域との関係性を絶った[※4] 図－3　関東大震災直後鎌倉長谷の震災状況
1928(S3)年～1969(S35)年頃 震災復興期		[敷地] ・稲瀬川以東が三橋旅館の敷地であった。関東大震災直後にみられる「三橋の池」は 1945(昭和 20)年頃まで存在したが、一部の土地を埋めることや売るなどして失われた[※1] ・かつて築山などがあった場所は雑地となったが、1934(昭和 9)年頃には夏の時期に地域の縁日が催されたことや、アメリカ映画「キングコング」の宣伝用の板が設置される「三橋の原っぱ」として親しまれた[4] ・昭和 20 年から昭和 25 年頃、左図中の長谷駅から旧由比ヶ浜駅近辺の稲瀬川両岸地域は湿地となっていた[※4] [施設配置] ・現存する土蔵の位置は関東大震災以前より変化はない[※4] ・初代当主は旅館を廃業し、残った敷地（約 4453 坪）を活用して貸別荘業を営んでいた。貸別荘は、左図 1 号、2 号、3 号、5 号、6 号、8 号、10 号、11 号、12 号、15 号、16 号、20 号に相当する[3]	・三橋家はじめ長谷近辺の大地主の多くはこの頃貸別荘業を営んでいた[※4] 図－4　鎌倉長谷三橋貸別荘案内
1964(S39)年以降 復興後		[敷地] ・1965(昭和 40)年かつて三橋の池が存在していた場所が長谷観音前第一駐車場となった[※1][※2][※3][※4] ・現在の敷地面積は約 500 坪になり関東大震災以前の約 22 分の 1 に縮小した[4] [施設配置] ・クロマツ、土蔵の位置関係は関東大震災以前より変化は見られない[※4] ・現在の住まいは 1964(昭和 39)年に建てられた 図－5　現存するクロマツ	・2000(平成 12)年頃に三橋家の庭石が光則寺に寄贈された。(二代目当主時期)なお、移動は造園業者により行われた[※2] ・一柳米店の現在の土地は三代目当主(現当主)と借地の関係を持つ[※4] ・2020(令和 2)年 3 月 31 日「三橋家土蔵」が「景観重要建築物等」に認定 図－6　景観重要建築等に認定された「三橋家土蔵」

【凡例】 ：敷地の鮮明箇所　：三橋旅館の建物　：三橋旅館不明建物　：建物　：川　：道　：畑　：田　：江ノ島電鉄線　：クロマツ　：雑地　：更地　：貸別荘　：三橋表門　三橋家敷地(賃貸物件)

３－３　まとめ

以上より、現代まで長らく不明とされていた三橋旅館について、近代における長谷の地域発展プロセスと閉業後の敷地変容を明らかにした。三橋旅館を介した地域観光およびそこに端を発する別荘文化は、長谷の近代化や地域発展に多大なる影響を及ぼしたことが確認された一方で、関東大震災に伴う閉業によって、地域との関りが途絶えたとともに、三橋家所有の敷地も大きく縮小した。特に地域との関りが途絶えたことは、鎌倉を代表する観光地の１つである長谷の貴重な地域情報の埋没に繋がったといえよう。

４．今後の課題

本研究では、現在まで長らく不明とされていた三橋旅館の歴史的変容と震災以前から 109 年に及ぶ敷地変容を断片的ではあるが捉えることができた。この成果は、三橋家所蔵の文献に依るところが大きく、貴重な資料によるところが大きい。今回の成果に反映することは出来なかったが、この他にも地域の店や寺社との関わりを裏付けるような資料が発見されており、今後はこれらの調査を遂行しつつ、地域に還元できるよう貢献したいと考える。